

令和7年産大崎地域の 大豆作技術情報(総括号)

令和8年2月3日発行
宮城県大崎農業改良普及センター
TEL: 0229-91-0726 FAX: 0229-23-0910
<https://www.pref.miagi.jp/site/osnokai/>

～令和7年産大豆の特徴～

- ・高温少雨が続いた影響により、主茎の生育が抑えられ、分枝が優勢する生育となりました。
- ・「タンレイ」は、収量が前年・平年を上回りましたが、虫害が多くなりました。
- ・「すずみのり」は、収量は高かったものの、虫害や未熟粒、莢ずれの被害粒が多くなりました。

1 気象経過

○播種期～開花期（5月～7月）

気温は5月下旬に低温となり、第6半旬には134mmの降雨がありました。6月中旬以降は高温が続き、6月14日に梅雨入りしたものの、その後も降雨なく、多照で乾燥が続きました。

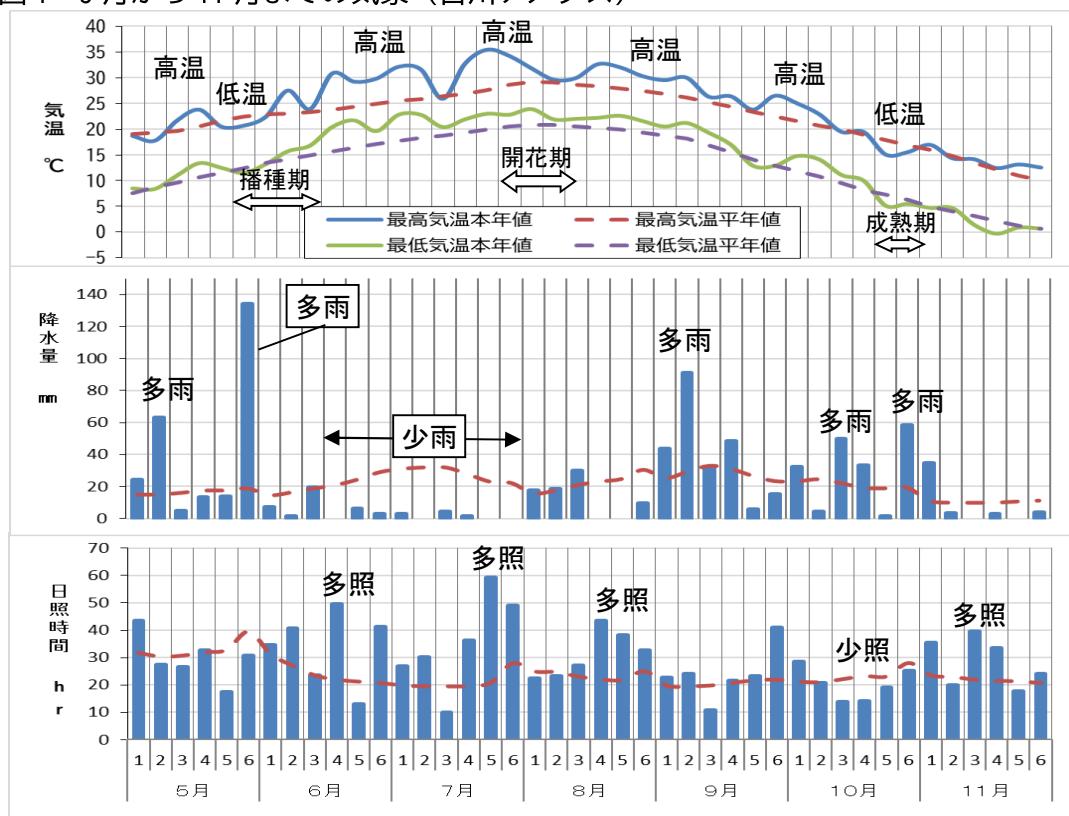
○開花期～子実肥大期（8月～9月）

気温は8月から9月中旬まで高温が続きました。8月は第1～第3半旬には降雨がありましたが、第4～6半旬は少雨となり、9月上旬は多雨となりました。8月中旬から9月初旬は多照となりました。

○黄葉期～成熟期（10月～11月）

気温は10月上旬が高温でしたが、下旬は低温傾向となりました。10月中旬と第6半旬、11月第1半旬は多雨となりました。

図1 5月から11月までの気象（古川アメダス）



※1 実線又は棒グラフが本年値、点線は平年値

2 生育概況

(1) 生育経過

- ・5月末の多雨により、播種が平年より遅れました。
- ・高温が長く続いたため、生育ステージが早まり、ほとんどの調査は場で7月下旬から8月初旬に開花期に達しました。
- ・全ての品種で成熟期が平年より早まりました。

表1 栽植様式と生育ステージ

地区名	品種名	区分	畦間	栽植密度	生育ステージ		
			(cm)	(本/m ²)	播種日	開花期	成熟期
古川	タンレイ	本年	75	12.3	5月28日	7月22日	10月25日
		平年差	-2	0.2	(1日遅い)	±0日	(7日早い)
古川	ミヤギシロメ	本年	75	9.8	6月6日	8月2日	—
		平年差	-1	-0.4	(2日遅い)	(2日遅い)	—
古川	きぬさやか	本年	75	11.5	5月30日	7月27日	10月24日
		前年差	-2	1.1	(2日早い)	(2日早い)	(3日早い)
小野田	すずみのり	本年	75	13.8	6月12日	7月28日	10月28日
		前年差	1	2.4	(4日遅い)	(2日早い)	(1日早い)

※1 平年比は、前5カ年（令和2年～令和6年）の平均値との比率（以下表同じ）

※2 「きぬさやか」、「すずみのり」は令和6年より調査開始（以下表同じ）

※3 「ミヤギシロメ」は坪刈りの時期を逸したため、成熟期のデータが空欄となっています。（以下表同じ）

- ・「ミヤギシロメ」は平年より主茎長が長く、分枝も多く見られました。
- ・それ以外の品種では、平年・前年と比べて主茎長が短く、主茎節数が少なくなる一方で、分枝数は多くなりました。
- ・「タンレイ」は、前年ほどではありませんが、莢先熟による青立ちが目立つほ場が見られました。

表2 生育調査

地区名	品種名	区分	主茎長(cm)				主茎節数(節/本)				分枝数(本/本)			
			7/25	8/10	9/1	成熟期	7/24	8/8	9/1	成熟期	7/24	8/8	9/1	成熟期
古川	タンレイ	本年	41	46	48	46	10.6	12.5	12.7	13.5	3.2	3.6	4.8	2.7
		前年比	63%	57%	57%	55%	74%	79%	81%	81%	154%	120%	152%	85%
		平年比	75%	69%	71%	69%	82%	84%	84%	89%	185%	114%	164%	70%
古川	ミヤギシロメ	本年	59	95	111	—	12.8	17.4	17.5	—	4.1	3.9	5.2	—
		前年比	130%	113%	123%	—	105%	106%	106%	—	214%	90%	106%	—
		平年比	141%	116%	125%	—	112%	109%	103%	—	224%	103%	119%	—
古川	きぬさやか	本年	30	77	78	77	9.3	10.2	10.5	13.1	4.0	4.0	8.3	5.0
		前年比	56%	56%	57%	58%	81%	72%	74%	88%	209%	119%	188%	100%
小野田	すずみのり	本年	36	45	49	36	8.1	9.2	8.6	9.0	1.7	3.3	4.7	5.6
		前年比	84%	66%	64%	49%	82%	67%	60%	63%	128%	124%	138%	156%

(2) 収量・品質調査結果

- ・成熟期の主茎と分枝の節をあわせた総節数は、各品種とも前年・平年並みかやや下回りました。しかし、着莢節数と有効莢数は平年並みかやや多くなりました。
- ・「タンレイ」は複粒莢が多く総子実数も多かったため、百粒重はやや小さかったものの、収量（子実重）は、平年・前年を上回りました
- ・「すずみのり」は総子実数が前年よりやや少ないものの、百粒重は大きく、前年並の多収となりました。
- ・「きぬさやか」は一粒莢が多く総子実数が特に少なかったため、百粒重は大きくなつたものの、収量は低くなりました。

表3 収量調査

地区名	品種名	区分	総節数 (節/m ²)	着莢節数 (節/m ²)	有効莢数 (莢/m ²)	総子実数 (粒/m ²)	百粒重 (g/百粒)	子実重 (g/m ²)	精百粒重 (g/百粒)	精子実重 (g/m ²)
古川	タンレイ	本年	376	267	609	1,073	24.6	281	26.2	252
		前年比	88%	115%	131%	152%	96%	140%	92%	152%
		平年比	90%	95%	107%	114%	90%	107%	94%	110%
古川	きぬさやか	本年	471	393	919	986	20.5	207	21.0	199
		前年比	97%	112%	105%	72%	92%	65%	91%	102%
小野田	すずみのり	本年	431	253	404	947	36.2	348	36.7	343
		前年比	104%	101%	95%	93%	102%	95%	103%	95%
古川農試 作況	ミヤギシロメ	本年(5/26播種)	602	381	874	—	38.7	347	—	—
		本年(6/13播種)	520	284	520	—	38.4	357	—	—

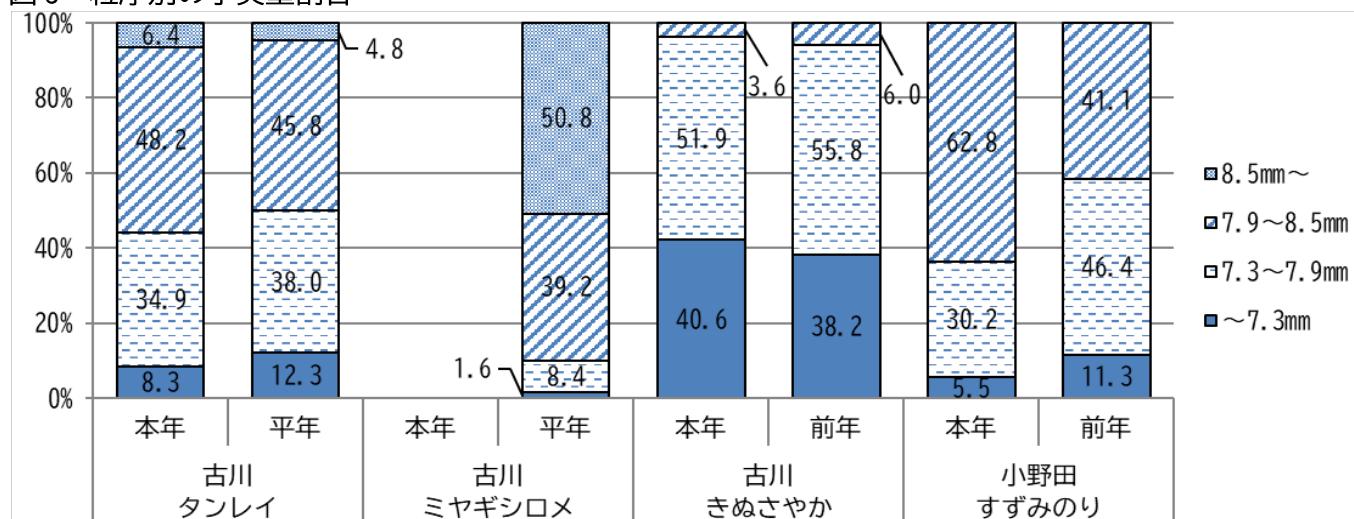
※1 精百粒重・精子実重は、「きぬさやか」のみ篩目6.7mm以上、それ以外は7.3mm以上のもの

※2 「古川ミヤギシロメ」は、坪刈りの時期を逸したため、宮城県古川農業試験場の作況試験の数値を使用しています（上記の数値は令和8年2月2日における速報値であるため、今後数値が変動する可能性があります。）。

○粒厚別割合

- ・「タンレイ」、「すずみのり」では、前年・平年より大粒(7.9mm以上)の割合が大きくなりましたが、「きぬさやか」では前年より、中粒(7.3mm以上)の割合がやや小さくなりました。

図3 粒厚別の子実重割合



○被害粒

- ・「タンレイ」は他の品種と比べて紫斑病に弱い品種ですが、本年の紫斑粒の割合は前年・平年を下回りました。
- ・「きぬさやか」では、裂皮粒の割合が大きくなりましたが、前年ほどではありませんでした。
- ・「タンレイ」と「すずみのり」は、虫害粒が多く、特にカメムシ類によるとみられる被害が多くなりました。
- ・全ての品種で青未熟粒をはじめとする未熟粒の割合が前年・平年より多くなりました。
- ・「きぬさやか」、「すずみのり」では前年と比べて、莢ずれの割合が多くなりましたが、褐変は伴っていませんでした。

表4 被害粒数割合

地区名 品種名	区分	被害粒 (%)							
		紫斑粒	褐斑粒	裂皮粒	虫害粒	腐敗粒	しわ粒	未熟	莢ずれ
古川 タンレイ	本年	1.5	0.0	1.2	14.5	0.4	3.4	9.5	3.7
	前年	4.7	0.0	8.5	6.4	5.4	0.0	7.9	6.5
	平年	3.3	0.1	3.6	3.7	1.6	2.6	2.5	6.4
古川 ミヤギシロメ	本年	—	—	—	—	—	—	—	—
	前年	0.2	0.0	5.5	1.4	0.7	0.0	0.5	0.0
	平年	0.0	0.2	4.9	1.6	0.4	0.9	0.1	0.0
古川 きぬさやか	本年	0.1	0.0	6.1	3.4	0.0	0.1	2.0	2.0
	前年	0.0	0.0	22.1	3.7	0.1	0.6	0.0	0.0
小野田 すずみのり	本年	4.3	0.0	3.4	17.1	0.8	0.6	4.4	6.8
	前年	0.0	0.0	2.4	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0

※1 「ミヤギシロメ」は坪刈りの時期を逸したため、本年における被害粒の割合は空欄となっています（前ページの粒厚別割合の図も同様）。

3 収量・品質に影響した要因

(1) 5月下旬の降雨と6月中旬以降の高温及び乾燥

降雨により播種の遅れや6月下旬以降の高温・乾燥が継続的に続いたため、主茎の生育が抑えられ、分枝の生育が優勢になったと考えられます。高温多湿で主茎が徒長し、分枝が少なかった前年とは対照的な状況でした。開花後の8月上旬には降雨があり、落花・落莢が防がれることで、着莢数、有効莢数が確保できたとみられます。

(2) 着莢期から成熟期の高温多照

開花後も高温傾向は続き、8月下旬や9月上旬の多雨はあったものの、莢の成長と子実の形成は順調であったとみられます。ただし、総子実数が高かったことと、高温でカメムシ類が多く発生していたことが、子実の肥大時の養分競合や吸害を促進し、未熟粒と吸害粒の増加につながったものと考えられます。

また、「きぬさやか」は、よりシンク器官の抑制が強く働き、着莢節数が多かったものの、無効莢数や一粒莢が多くなり、粒径も小さくなり、収量も低下しました。

(3) 品質について

裂皮粒は品種により発生傾向が異なりますが、子実成熟過程における栄養バランスの崩れ等が発生を助長させるといわれています。

雑草が多発したほ場では吸汁性カメムシの発生が多く確認されました。雑草の繁茂が殺虫剤の拡散を阻害したこと、吸汁性カメムシを誘引したことが虫害粒の多発の要因ではないかと考えられます。

また、総子実数が多かったことやカメムシによる吸汁被害による子実の肥大停止が、青未熟粒をはじめとする未熟粒の増加の要因となったと考えられます。

「大崎地域の稲作技術情報」、「大崎地域の大豆作技術情報」、「大崎地域の麦作技術情報」は、当普及センターのホームページでもご覧いただけます。インターネットで「大崎農業改良普及センター」と検索または右のQRコードを読み取ってください。

